

## パスカルの《アポロジ》の プラン復元に関して (XXIII)

竹 下 春 日

### 21° 《永続性》

〔I〕 真の宗教は神の摂理によるものであること、即ちその永続性は神の加護によるということについて。——《……曲げることによってみずからを保った例は珍しくないが、それはほんとうにみずからを保持することではない。それでもなおついに全く滅びるのだ。千年もつづいた国は一つもない。なのに、この宗教はいつもみずからを保持し、しかも変節しなかった。これはその神聖を示すものだ。》(La. 539-Br. 614)、《『創世紀』十七章。〈私はあなたとのあいだに契約をたてて、永遠の契約とし、あなたの神となるであろう〉／〈あなたは私の契約を守らなければならない〉》(La. 563-Br. 612 (275))、《「私は七千人を私のために残した」世に知られず、予言者たちにさえ知られなかった礼拝者たちを、私は愛する。》(La. 610-Br. 788 (289))。最後の断章中の引用文(『列王紀上』19の18)は、迫害を受け窮地に陥った預言者エリヤに対する、神の言葉であって、ヤハウエを信ずる宗教の存続を保証したものである。

〔II〕 永続性の諸象面について。

(一) 真の宗教の永続性——快樂に反する唯一の宗教の永続性 (La. 543-Br. 605)、神の肢体を目指す宗教の永続性 (La. 313-Br. 477-606 (165))、真のユダヤ人と真のキリスト者との宗教の同一性 (La. 554-Br. 670 (266))。

(二) メシア信仰の永続性——《永続性。／メシアはいつも信じられてきた。アダムの伝説は、ノアとモーセとにはなお新鮮であった。それ以後、預言者た

ちはメシアのことを予言し、それとともに他の事柄をも常に予言した。それらの出来事はときどき人々の目の前で起こり、彼らの使命が真実であることを示した。イエス・キリストは奇蹟を行ない、使徒たちもそれを行なって、すべての異教徒を回心させた。そのようにして、あらゆる予言は成就し、メシアは永久に証明されたのである。》(La. 541-Br. 616)。なお同主旨の断章としては、La. 540-Br. 613, La. 542-Br. 655, La. 550-Br. 617 (262) がある。

(三) 教会の永続性——La. 544-Br. 867, La. 561-Br. 859 (273), La. 562-Br. 858 (274)。教会の永続性を示す歴史について、パスカルは次のように明示する——《教会の歴史は、本来、真理の歴史と呼ばれるべきものである。》(La. 562)。

〔Ⅲ〕 真の宗教の維持に貢献した人々。——(一) ユダヤ民族について。

(イ) ユダヤ民族の長所——La. 552-Br. 620 (264), La. 555-Br. 619 (267), La. 553-Br. 631 (265), La. 549-Br. 630 (261), La. 557-Br. 630 (269)。このうち代表的な La. 552 を掲げると、次の如くである——《ユダヤ民族の長所。／……最初に私が気づくのは、一民族が全部同胞として構成されていることである。……／この民族はたんにその古さにおいて重要であるばかりでなく、またその永続性においても異例である。……／この民族を治める律法は、世界の法律のなかで最も古い完全なものであるとともに、また一国において常に絶えまなく守られてきた唯一のものである。……／あらゆる法律中の最初のものを含むこの書物は、それ自身、世界最古の書物であって、ホメロスのもの、ヘシオドスのもの、その他のものは、それより六、七百年もおくれているのである。》

(ロ) ユダヤ民族の永続性。ユダヤ民族の永続性については、直前の断章中に既に触れられているが、パスカルはなおこの民族の永続性のみならず、その歴史の確実性について、多くの筆を費している——La. 415-Br. 628 (196), La. 416-Br. 594 (197), La. 421-Br. 593 (202), La. 458-Br. 622 (215), La. 551-Br. 621 (263), La. 556-Br. 618 (268)。

(二) 各宗教の二種類の人々について。パスカルは、各宗教内における高

級なる信者と低級な信者との二種類を区別している。次の fr. は、その代表例である——《それぞれの宗教における二種類の人々。／異教徒のあいだでは、動物の崇拝者と自然宗教内の唯一神の崇拝者。／ユダヤ人のあいだでは、肉的な人々と古い律法内のキリスト者であった霊的な人々。／キリスト者のあいだでは、新しい律法内のユダヤ人である粗雑な人々。／肉的なユダヤ人は、肉的なメシアを待望した。粗雑なキリスト者は、メシアが彼らをして神を愛することを免れさせたと考える。真のユダヤ人と真のキリスト者とは、彼らをして神を愛せしめるメシアをあがめる。》(La. 545-Br. 609)。この引用文中の最後の二者が、真の宗教の維持にとって重要な役割を果たすものであることは、改めて言うまでも無いところであろう。なお同主旨の断章として、次のものが存する——La. 546-Br. 607, La. 548-Br. 608。

[IV] 聖書の意義について。——(一) エズラ書否定。旧約外典『エズラ第四書』十四章において、エズラが捕囚中に焼失した聖書を再編したことが、記されている。パスカルは、諸々の点において、エズラへの反論を試みている。例えば、断章 La. 565-Br. 633 (277) 中で、次のごとく論じている——《エズラの話を反駁する。／『マカベア第二書』二章。／ヨセフス『古代史』二章一節。クロスはイザヤの預言を理由にして民族を釈放した。——ユダヤ人はクロス治下のバビロンにおいて、その財産を平和に維持した。だから、彼らが律法を持っていた可能性は十分ある。／ヨセフスは、エズラについてのあらゆる歴史のなかで、この再編のことには一言もふれていない。／『列王紀下』十七章二七節。》

以上と同主旨のものとしては、La. 564-Br. 632 (276), La. 566-Br. 634 (278) の二断章が存する。

(二) 聖句の明瞭さについて。——La. 538-690, La. 547-Br. 689。後者の fr. において、パスカルは次のように説いている——《ダビテやモーセの一句、たとえば「神は心に割礼をほどこされるであろう」というような句で、彼らの精神を判断することができる。／その他のあらゆる説話が漠然としており、彼らが果たして哲学者であるかキリスト者であるかが疑われるにしても、この種

の一句が他のすべてを決定する。あたかもエピクテトスの一句が、他のすべての語句を反対の意味に決定するように。それまでは不分明がつづくが、それからはそれがなくなる。》

以上の(一)及び(二)において、パスカルが言わんとする所は、次の事である。即ち聖書中に述べられている事は、それが真正の宗教者の手に成るものである限り、正確かつ明白であって、われわれはこれを信頼しうるということである。したがって聖書中の重要事件は、メシア信仰の古さと歴史的永続性とを証するものであり、キリスト教の最大の基礎たるイエス・キリストの出来事はすべて、神の業によるものであることを、宗教的客観的事実として、誤りなく示しておるという事である。

## 22° 《モーセの証拠》

本章の目的は、聖書中に語られた歴史的事実の確實性を証明すること、しかも真の信仰は奇蹟や知恵、知識を超えるものであることを、述べるにある。論述内容は、大要四つに分れる。

〔I〕 ユダヤ民族の族長たちの長命が、過去の事実の物語(旧約中の)を保存するのに役立ったということに就いて。——《……族長たちの寿命が長かったことは、過去の事実の物語を失わせるかわりに、かえってそれを保存するのに役立った。なぜなら、人が先祖の物語をよく知らないことがあるのは、彼らとともに長く生活しなかったからであり、人が物ごころのつく年ごろになるまでに、彼らが多く死んでいるからである。しかるに人々が非常に長命であったころは、子供も長いあいだ親たちとともに生活した。彼らは長いあいだ互いに語り合った。そんなとき、彼らは先祖の物語のほかは何を話したであろうか。……》(La. 569-Br. 626)。

〔II〕 モーセの証言。——(一) 証言の内容——《モーセの証拠。／なぜモーセは人々の寿命をかくも長くし、彼らの世代をかくも少なくしたのであろうか。……／とはいえ、彼はかつて人の思いに浮かんだもののなかで最も記憶す

べき二つのこと、すなわち、天地創造と大洪水とを非常に近く、ほとんどすれすれに置いている。》(La. 569-Br. 624)。

(二) モーセの証言の確実性に対する裏づけ——《セムはレメクを見、レメクはアダムを見たが、そのセムがまたヤコブを見、ヤコブがモーセを見た人々を見た。だから、大洪水と天地創造とは事実である。……》(La. 573-Br. 625)。次に、パスカルは、《モーセは自分自身の恥を隠さない……》(La. 572-Br. 629)と述べ、モーセの証言の確かさを保証している。

[III] 律法に対する民衆の熱心さについて。——パスカルは、預言者たちの語ることを歴史的事実と見做したが、《律法に対するユダヤ民族の熱心、とりわけ預言者がいなくなったのちの熱心。》(La. 574-Br. 702)について触れ、ユダヤ民族の伝承の確実性の傍証としている。なお同主旨の断章に、La. 571-Br. 703 が存する。

[IV] 奇蹟や知恵の偉大さは、神への愛とはなり得ないということに就いて。——《……この宗教は、あらゆる奇蹟とあらゆる知恵とをならべたのち、それらのすべてを否認して言う、自分には知恵もしるしもない、ただ十字架と愚かさとがあるだけだ、と。……それらのすべてはわれわれを改変することも、われわれに神を知らせることもできない、それをなしうるのは知恵もしるしもない十字架の愚かさの力であって、この力を持たぬしるしではない、と。》(La. 568-Br. 587)。

この章中には、他の諸断章と一見不調和のごとく見える断章が存する、それは次のものである——《もし一週間をささげるべきであるなら、全生涯をささげるべきである。》(La. 570-Br. 204 bis)。この fr. の内容が示すものは、一方では一般的なクリスチャンのための宗教的倫理規定をなすものであり、他方においては真の信仰者の実存的意識である。この断章中には、《全生涯をささげるべきである》on doit donner toute la vie という語句が存するが、なぜ《全生涯をささげるべき》なのであろうか。真実の信仰的実存にとって、「なぜ」に対する「理由」なるものの存在およびその価値は、問題にならない。次の断章は、かかる理論的理由なるものを超越する実存の例を示している——

《預言と証拠とを知らずにキリスト者になっている人たちを見かけるが、彼らでも、それらのことについて、それを知っている人たちと同じようによく判断する。彼らは、他の人たちが精神によって判断するところを、心情によって判断するのである。神が彼らを信じるように傾けられたのであって、したがって彼らは、きわめて効果的に納得しているのである。／……この信者が自分では証明できなくとも、神から真に靈感を受けたものであるということは、この宗教の証拠を知っている人たちが、難なく証明してくれるでてろう。》(29° 章中の La. 732-Br. 287)。かくて《全生涯をささげるべきである》とする本来的実存の決断は、まさに《神から真に靈感を受けたもの》の判断であり、神が《信じるように傾けられた》ことによる、《きわめて効果的に納得している》内的事実を示すものである。即ち全生涯を賭すべきとする信仰的決意こそは、神の慈愛の力——《十字架の愚かさの力》*la vertu de la folie de la croix* (La. 568) によるのであって、われわれは茲に La. 732 の思想を介して、La. 568 と La. 570 が内面的に深く結びついておるのを、理解しうるであろう。

以上により、パスカルは《モーセの証拠》による知的理解を介して、信仰への道を準備しながらも、真の信仰が理性の働きを超えることを、今また茲で説いているのである。既にパスカルは、次のように述べている。——《信仰は神よりの賜物である。われわれがそれを推理の賜物であると言っているなどとは思わないでほしい。他の諸宗教は、彼らの信仰についてそうは言わない。それらの宗教は、信仰に達するためにただ推理しか提供していないのであるが、それなのに、推理は信仰へ導いてくれないのである。》(18° 章中の La. 376-Br. 279)。

### 23° 《この神の証明法の卓越性》

[I] 神にかんする形而上学的証明は、説得力が弱いということについて。——前章においては、理性的活動は信仰に達し得ないことが、述べられた。しかしこの事は、理性の働きが宗教に一切役立たないことを、意味しない。否むし

る逆でさえある。既に 18° 章において、宗教は理性の原理に反するものでないことが、説かれている (La. 358-Br. 273)。さらに同章中には、次の断章をわれわれは見出し得るのである——《信仰に三つの手段がある。理性と習慣と靈感とである。ただひとり理性をもつキリスト教は、靈感なしに信じるものを、自分の真の子として受け入れない。これはしかし理性と習慣とを排除する意味ではなく、その反対である。だが、精神をその証拠に向って開き、習慣によってそこに確立し、しかも真の有益な結果をもたらしうる唯一のものである靈感に、へりくだることを通じて身を捧げなければならないのである。〈キリストの十字架がむなしくならないために〉》 (La. 396-Br. 245)。

かくして理性による証明は、靈感なしには真の信仰たりえないにせよ、信仰への道を或る程度準備するものである。ところで理性の働きは、或る程度までの有効性を持つに過ぎないとはいえ、この程度性には優劣が存するのであって、これこそはパスカルが問題とするところのものである。而して神にかんする形而上学的証明こそは、証明力において劣るものであり、この事をパスカルは次の諸断章において力説しているのである——La. 381-Br. 543 の前半の部分、La. 19-Br. 243 (19), La. 297-Br. 78 (152), La. 456-Br. 428 (213)。これらのうち代表的なる所説は、最初のものである——《序言。神の形而上学的証拠は、人々の推理からはなはだかけ離れ、その上すこぶるこみいっているので、さして感銘を与えない。それはある人々には役立つにしても、彼らがその証明を見ている瞬間だけ役立つにすぎない。一時間もたつと、欺かれたのではないかとあやぶむ。……》。なお La. 297 はデカルト説への批判であるが、これについては、拙論 XIV 回の (152) を参照のこと。

〔II〕 イエス・キリストを介してのみ、神を証明しうる、或はイエス・キリストを介しなければ神を証明しえないということに就いて。——《イエス・キリストによる神。／われわれはイエス・キリストによってのみ神を知る。この仲保者がなければ、神との交わりはすべて取り去られる。イエス・キリストによって、われわれは神を知る。イエス・キリストなしに神を知り神を証明すると主張した人々は、無力な証拠を持っていたにすぎない。しかし、イエス・キリ

パスカルの《アポロジ》のプラン復元に関して (XXIII)

ストを証明するものとして、われわれは預言を持っている。それは確實明白な証拠である。これらの預言は成就され、事実によってその真であることを立証したのであるから、これらの真理の確かさを、したがってイエス・キリストの神性の証拠を示している。ゆえに、彼において、また彼によって、われわれは神を知る。……》(La. 380-Br. 547)。なおこれと同主旨のものを、以下において見出すことが、出来る——La. 381-Br. 543 の後半の部分、La. 382-Br. 549, La. 456-Br. 428 (213), La. 602-Br. 548 (281)。

[III] イエス・キリストを知ることは、墮落と悲慘から救われる道であるということに就いて。——《自分の悲慘を知らずに神を知ることは、高慢を生みだす。／神を知らずに自分の悲慘を知ることは、絶望を生みだす。／イエス・キリストを知ることは中間をとらせる。なぜなら、彼においてわれわれは神とわれわれの悲慘とを見いだすからである。》(La. 383-Br. 527)、《もし不分明でなかったならば、人間は自分の墮落に気づかなかったであろう。もし光がなかったならば、人間は救いを望まなかったであろう。したがって神がなかば隠れなかば現われているということは、われわれにとって正当であるばかりでなく、また有益でもある。なぜなら、自分の悲慘を知らずに神を知らずに神を知ること、神を知らずに自分の悲慘を知ること、人間にとって等しく危険だからである。》(La. 317-Br. 586 (169))。

扱て [III] と同主旨の思想が、既に 16° 《他宗教の虚偽》の章中において述べられ、高慢・怠惰・絶望すなわち墮落と悲慘を癒しうるのは、キリスト教のみであることが、説かれていた。今や本章において——神の証明の卓越性が示された事によって——、キリスト教が他宗教・哲学諸派に勝る所以が、一段と明瞭となり、確立するに到ったのである。

(XXIII 回了)